

Karl Heider 2015 The Rashomon Effect: When Ethnographers Disagree. *American Anthropologist* 90(1): 73–81.

カール・ハイダー「羅生門効果：民族誌家が同意しない時」

序 pp.73–4

・問題設定

- 背景：民族誌家の間の不一致は方法論的な難問を引き起こす。
- 問い：私たちはどのように難問を理解したり対処したりできるのか？
- 目的：難問に対処する概念枠組みを引き出す。

・人類学において民族誌家同士の対象についての見解の不一致はしばしばあった。

- 例：Redfield と Lewis (メキシコの村)、Mead と Fortune (ニューギニアのアルペシユの人々の戦争)、Goodenough と Fischer (トラック諸島の居住規則)、Benedict に対する、Bennett や Codere の反応、Gartrell と Slater (タンザニアのニーカの人々) Reser と Hipper (オーストラリアの先住民)、Freeman と Mead (サモア)

・こうした不一致へのアプローチは、真理、現実、科学的方法についての立ち場を反映する。

- 哲学における論理実証主義／経験主義と、主観的形而上学的な意味の依存性の対立
- 人類学における実証主義-構築主義論争 (Harris vs. Peacock)
- 著者は両者を止揚した立場：中間の修正された構築主義：民族誌は発見されるのではなく作られる。
- 他の学問分野においても 80 年代には構築主義は一般的となってきた。
例：クーンのパラダイム論や、心理学で観察者バイアスを作り出す要因が指摘されるなど

・この論文は、民族誌的な不一致が重要な難問を提示するということを主張する。

- 現実が共有されるという想定によってのみ、解決されるべき難問となるというアイロニーがある。
- 導きとなるのは「羅生門効果」(：ひとつの出来事において、人々がそれぞれに見解を主張すると矛盾してしまう現象)
- 誰が正しくてだれが間違っているのかという問いは面白くない(1)。「間違い」ですら当該文化のみならず(2、3)、民族誌家の文化的背景の理解(4)にも重要となる。
- 民族誌的非同意を取り上げることは、民族誌一般の理解にも役立つ。

・以下は、民族誌家の見解が食い違う場合にありうるパターンの場合分けである。

1、誰かが間違っている p.75

- ・多くの不一致は明快に解決することができない。
 - 解決策は、二人の言い分の一つをとるのではなく、複雑な混合になるから。とはいえ、真理の否定や、うその可能性を否定するわけではない。
 - HRAF (the Human Relations Area Files)¹に携わる研究者たちは、実証主義的な立場から、民族誌的な間違いにアプローチしている。短期的な研究者は長期的な研究者より間違う、といった解釈で処理できるとしている。

2、彼らは異なる文化や下位文化を見ている

- ・同じ対象について異なる部分を観察しているために異なるということがありうる。
 - 盲目の二人が象の異なる部分に触れたために象についての合意が得られないという寓話
 - 社会において性別や階層や職業の分化によって状況の異なる見解を産み出す。そのためデータが詳細化されていなかったり、注意深く一般化されないと不一致が生じうる。

3、彼らは同じ文化を異なる時に言及している

- ・民族誌家が異なる時間に同一文化について調査したために、違う結果となることがある。
 - Mead と Fortune の戦争についての非同意は時間の違いに基づく
 - Ember は Freeman による Mead の批判が、Mead のデータの時間と空間を取り扱っていないと主張する。
- ・民族誌家が、文化的時間サイクルの異なる段階を調査する可能性
 - Ladd は、多くの民族誌家が夏にフィールドワークを行っていたナヴァホの人々の間で、冬に調査を行い、冬にしか語られない倫理の問題を学んだ。
 - 著者もパプアニューギニアのダニの人々の豚祭りに、3年ほどのフィールドワークの後の4度目の訪問で初めて遭遇し、「低強度 (low-intensity) の文化」という自身の評価の再考を迫られた。

4、彼らは同じ文化を異なるやり方で見ている pp.76-78

- ・ a. 民族誌家の異なる性格
 - 調査者の性格に応じて、文化において強調する特徴づけが異なることもありえる。
- ・ b. 民族誌家の異なる価値体系
 - 民族誌家のイデオロギー的なバイアスが民族誌に影響を与えうる。
例：機能主義が文化の調和的な側面を過剰に強調する。

¹ 世界の文化を比較研究するためにアメリカ・イェール大学で開発されたデータベース。

- c. 民族誌家の異なる文化
 - 民族誌家自身も自身の文化の産物であり、自身の文化を通じて他の文化にアプローチする。
 - メアリ・ダグラスは、ヌエルの人々が英国人に研究され、ドゴンの人々がフランス人に研究されたことについて、逆だったらどうなっていたかについて考察した。
 - ダグラスの議論は論理的だが、著者は、同時に民族誌という学問分野は強力であるために、よい民族誌家になる過程で、研究者の文化的出自の痕跡を消し去る可能性もあると考えている。
- d. 民族誌家の他の特徴
 - 民族誌家自身の特徴（例：ジェンダー、年齢、人種、性的嗜好、家族構成、個人的健康、身長 etc...）も、調査に影響を与えうる。
 - そのため全部ではなくとも、限界にもなりうる特徴を記述することがフェアになる。
- e. 研究計画における異なる理論的な志向
 - 研究者のジェンダーだけでなく、ジェンダーについてのデータが多義的になる。フェミニズム文献に注意を払っていないと、社会における女性の役割に関心が行かないことがある。
 - 藁人形論法の策略（the straw man gambit）というのものもあるが、発見するのも難しく、また対処するのも難しい。新しい理論を提唱し、古いものを廃止する研究で、学問的な要求というよりも個人の達成のためというものはある。
- f. 同じ民族誌家が時間を経て自身の解釈を変えた時の状況
 - 長期間のフィールドワークを行う上で重要。著者自身も博士号取得までの見解とそれ以後の見解が異なる。
- g. フィールドにおける異なる期間
 - 妖術が、短期間の調査を行った民族誌家よりも、長期間の調査を行った民族誌家によって報告されている一方で、酒による喧嘩の報告については有意に差異がないと、Naroll は指摘している。
 - 期間の事象の観察についての影響はあるが、出版された民族誌の中からそれを厳密に特定することは難しい。
- h. 言語の異なる知識、異なる言語の知識
 - 通文化研究の基礎においては、民族誌家の言語能力は影響がないとしている。

- しかし、解釈の不一致という問題において言語能力は大きく影響すると著者は考える。
例：儀礼での発話を異なるニュアンスで翻訳する二人の民族誌家
- ニューギニア研究において、土着言語とピジン英語で行われる研究も違いがありえる。著者はピジン英語で行う短期の調査では、時間をかけて土着の言語を学ぶ調査の強みを得られないと考えている。
- i. ラポールの異なる程度
 - 先の問題とも関連する問題である。同僚とのインフォーマルな議論からも民族誌家が対象の人々と異なった立ち位置であることがわかる。
 - 上に挙げた g、h、i の問題は、民族誌家の能力 (competence) に関わるという点で、リストの他の問題とは異なっている。
 - フィールドワークの期間、言語の知識、ラポールに関しては、長ければ長いほど／多ければ多いほど、よい。
 - ただし、長い滞在であるからと言って、研究に深い洞察がある保証にはならない。
- j. 以前のフィールドワーク
 - 多くの民族誌家は若いころに最初に行ったフィールドワーク経験で自身の価値観を構築する。そのため、次に別の民族誌を書く時にも引き継がれるものがありうる。
例：以前に、友好的で共感的な民族を調査した民族誌家が、次に別の民族の調査をした際に、否定的に描く
- こうした問題を体系的に考えると、民族誌家の不一致にどう対処するかという問題は、民族誌を理解する上で知る必要のあることに関するより広い問題を提起することがわかる。